

今回は、全体的にまとまりのいい作品が多く、また持ち味もそれぞれに違って、自分がどんなタイプの作品を書こうとするのか、意図というか戦略の確かさを感じました。また、優秀賞に中学生の作品が二編選ばれたように、その他の作品も含め、文芸では中学生の健闘が目立ちました。

さて、このコンクールでは、メルヘンやファンタジー系統、SFやショートショート風な応募作が多いのですか、そうした中で「秋の声」は日常的なできごとが題材のリアリスティックな物語でした。日付を追ってストーリーが淡々と進行していき、読者をうまく誘導して、それが余韻の残るラストに見事につながります。短編小説としての構成がよく考えられており、情景もていねいに描写されています。もちろんさまざまなジャンルの作品があっただけいいのですが、こんなふうに、なにげない日常の中からドラマを見出すことができることを、この作品は確かに証明してくれました。あとは、ストーリーに直接関係のない、例えば主人公の「部活」の中味（それによって、主人公のイメージが少し変わってきます）や家族の様子などほんの少し付け加えることで、作品がより奥行きのあるものになると思います。

「空間写真」は、これもファンタジーやSFではありませんが、日常ドラマというよりは、人間の生き方そのものをテーマにした、言わば「大きな物語」を意図した作品でした。「この島が嫌いな訳じゃないんだ」というキーワードを、物語の基調に据えるという戦略も、作者のセンスを感じさせました。こういう作品は、作者が少しガマンをして、じっくりじっくり語っていくことが肝心です。それによって、読者が主人公の心情に少しずつ共感していくことができるのです。しかし、パリでの「青年」との出会いの顛末は、展開としてやや急ぎすぎの感がありました。そのため、最後のところで読者が「良かったな……」というふうに、あまり思えないのです。でも、こういう作品に挑み続ける中で、そのあたりの加減は体得されていくものだと思います。

あと二つの受賞作品については牧野節子さんに譲りますが、受賞作以外では、「時空鉄道」と「あの森のなかで」が、前者は短編のタイムスリップものとして、後者はややゲーム的な世界観の長編ファンタジーとして、かなり完成度の高い作品だったと思います。ただ、オリジナリティという点で、受賞作に一步及びませんでした。

創作への第一歩は、やはり好きな作家を見つけることでしょうか。いろいろ影響を受けながら書いていく中で、自分らしさが少しずつ見えてくると思います。